植物との対話

佐藤眞生

マオじいの結（ゆい）

はじめに　3

1 植物は芽生えた場所に適応した体をつくる……5
共生　6
自然環境？　9
自然保護？　11
場所を死守する樹　15
無駄をなくすイタヤカエデ　17
野生植物と栽培植物　19
トウダチ　21
気温・地温・水温　23
育苗と生育の適温　25
野菜の生育と日照時間　27

2 植物はエネルギー源を自前でつくる……29
自給自足　29
嫁にいくときもっていったトチの木　32
植物の食べ物　35
ウサギは薬草を食べている　37

3 植物は自己修復能力を持つ……40
生け花　41
キュウリの嘆き　47

植物との対話／目次

大根の戒め　49
ナラ枯れ　51
植物は何故長寿か？　53
無農薬・有機栽培　56

4 植物は必要なモノを呼ぶ……58
雌雄異株と雌雄同株の草の話　59
食草・食樹　62
シイタケの語り　67

5 植物はすべてを受け容れ自在に生きる……69
ふるさとって何　70
生き死に　73
樹恩　76
便利と効率は悪　79
ブナの実が豊作になるとネズミが農作物を喰い荒らす　81
時節　84
サクラ　86
「葉」という字　88
連作障害　90
パンダの主食は竹　93
二度咲き　95

はじめに

二〇一三年、野菜づくりをはじめてから一七年目。野菜は殆ど自給、店で買うことは稀です。今年から米もつくります。

野菜や米、それに野草、まちや山の木々、こうした植物と接し、それとなく観察すると、人間の生き方について教えられることがたくさんあります。

植物は地球上で動かない生き方を選択しています。動物は必要なモノを求めて動きますが、植物は生まれた場所を動きません。それなのにしっかり、したたかに生きています。しかも、動かない生き方の知恵には驚嘆するばかりです。

その基本は自然に遵い、自然のすべてに完璧に適応するところにあるようです。

人間は動きすぎて間違うのではないか？　動かない生き方に学ぶことがあるのではないか？　そう考えるようになりました。こうして植物の観察、植物との対話が

始まりました。

ご縁をいただき北摂のタウン誌『バーズアイ』に二〇〇九年四月から私と植物との対話を連載することになりました。連載は二〇一二年四月まで続きました。延べ三二回分と没になった三三回目と三四回目の原稿を小冊子にまとめることにしました。

連載にお寄せいただいたご意見やご感想も、お許しをいただき取り上げることにしました。

1 植物は芽生えた場所に適応した体をつくる

植物の体は茎と葉と根という三つの器官からできています。花もありますが、花は葉の変形です。

茎は根と葉の間で水分や養分のやりとりをし、葉の足場になり、葉に太陽光を当てる役割があります。ほかの植物との太陽光の取り合いに勝たなければなりません。もし、茎が低くてほかの植物の陰になるようなら、早めに花を咲かせて種を飛ばします。もっと生育条件のいい場所へ移動するためです。

葉の形や大きさはほかの植物との太陽光の争奪状況や自然条件や遺伝子によって決まります。例えば、水辺に生える植物は水の抵抗を排除するために葉を細くします。

根は水分と養分を吸い上げます。根は水分のあるところまで深く遠く伸びます。根には茎を支える役割もありますが、そのために根は枝張りの先端まで伸びます。

身体は自然に遵い、こころは身体に発するという教えではないかと思います。

共生

宿木（ヤドリギ、ホヤともいう）は、ケヤキなどほかの樹に半寄生する常緑の低木です。宿木の果実を野鳥が食べます。鳥は種子を排泄します。その種子は一緒に排泄される果肉の粘液によってほかの樹の枝などに付着し発根・発芽し寄生します。

人間界では「共生」という言葉が盛んに使われています。宿木はこれを次のように解説してくれました。

宿木は独立していますが、他の樹にも寄生します。寄生した樹の養分や水分をもらって成長します。寄生された樹にとっては迷惑かもしれません。でも、宿木としては寄生した樹が葉を落とす冬場に葉を茂らせて光合成に貢献します。

植物界の「共生」には、一方的な寄生や宿木のように少しは宿主の役に立つもののほかに、キノコや豆や稲のように菌類と一体になっているものもあります。

寄生は少なくとも寄生する方に利益があります。寄生される方にもそれでダメになるような被害はなく、受け容れられるという状態です。

菌類と一体になっているものはまさに助け合ってひとつになっています。例えば、キノコ類は菌類と藻類でできています。菌類が乾燥から藻類を守り、藻類は光合成で菌類に栄養分を供給しています。

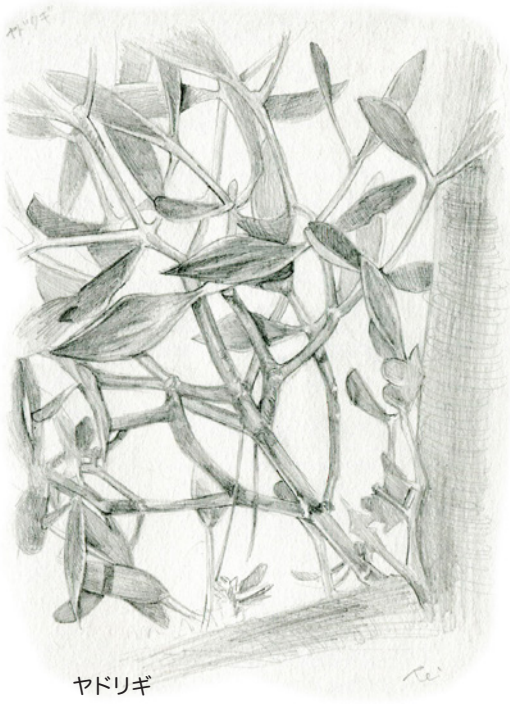
植物の「共生」は、双方または片方に利益がある場合、片方に利益がなくとも受け容れて協力している場合を意味します。

植物の共生には助け合うという意味が込められています。共生は地球の分身同士が助け合うということなのです。

しかし、人間界では「共生」を〝共に生きている〟あるいは〝同じ場所に棲んでいる〟という意味で使っていますね。同じ場所にいるというだけで「共生」に特別の意味はありません。〝人間は地球と共生している〟という人もいますが、ここまでくると主客転倒です。人間は地球の一構成要素でしかありません。しかも、人間は地球にとってあってもなくてもいい存在であることを忘れています。

●寄せられた投稿／ＭＭさん

次々と内容のある智恵文をお創りですね。ヤドリギ君の話、興味深く拝読。もと生物部にいた者には面白くて仕方ありません。願わくば、植物達の話部分は表現が植物語なら対話として光るように感じました。最後の部分は新しいものを生む、自惚れ否定ですね。爽快に感じました。



ヤドリギ

散歩道に生えてる楠大木さんの上の方にはシュロが宿ってますし、のきノブがたくさん茂ってます。南洋のジャングルには木々に蘭がひっついていると聞きます。

自然環境？

兎の好物オオバコはどの道端にもある草で車前草ともいいます。車のよく通る道に生える草という意味です。踏みつけられることが成長の条件になっています。踏みつけられないオオバコは高く伸びる性質がないため他の草との太陽光獲得競争に負けます。

踏みつけられることを条件に成長するオオバコに、人間がよく使う「自然環境」ということばについて聞いてみました。

オオバコは獣道や人の通る道に生えていたものが、その条件に適応して強くなったのではないかと思います。踏みつけられない場所では、他の草に負けて消えてしまったのでしょうね。踏みつけられる場所ではそれに弱い他の草は消えていきます。その踏みつけられる場所を、オオバコ自身が選んだり造ったりはできません。おのずからそうなるだけです。なるようにしかなりませんし、なるべくしてなるという

オオバコ

しかありません。

植物の世界へ人間界から「自然環境」という言葉が頻繁に聞こえてきます。植物からみますと自然は環境ではありません。私ら自身が自然そのものであり自然の分身です。自然は私らの内にあります。環境というと、それは私らの外にあるもの、私らが管理したり、造ったりできるものということになります。

人間にとっても自然は植物と同じように人間自身の内にあり、管理したり、造ったりすることは出来ないものだと思います。

人間が自然を環境と意識するのは無理もないことだと思います。私ら植物は自

然にすべてを委ねて生きていますが、人間は便利で快適な都会で、冷暖房完備のビルや住宅で暮らし、お金で何でも買えますから、自然を殆んど意識せずに生きています。自然を意識するのは台風や地震や洪水のときくらいでしょう？　そんな場合でも科学や技術の力で何とかできると思うでしょう？

私らは自然界全体のつながりを感じ、すべてがひとつだと思っているので環境という意識は皆無です。人間が環境という意識を捨てて、すべてをひとつのものとして意識できれば自然破壊はおのずからなくなるでしょうね。

自然保護？

人間に自然保護はできるのか？　とんでもない思い上がりではないのか？　この疑問を誰にぶつけようか？　適役がいました。杉です。

ワシらが地球に根をおろしたのは二億一千年くらい前のことじゃ。ワシらは伸び

るのも早いが、樹の仲間で一番長生きじゃ。ワシらは日本の巨木の中で一番多い。背も一番高い。一三〇〇年前の法隆寺にヒノキやケヤキと一緒に使われておってのう、建築材料としても頑丈じゃ。ところが困ったことに、大気汚染にはまるで弱いんじゃ。だから、東京にはワシら杉の巨木がないんじゃ。

屋久島の大王杉は樹齢三〇〇〇年、縄文杉は樹齢二一七〇年といわれておる。なんで長寿かというとな、自然が破壊されてなかったからじゃ。ありのままの自然があったからじゃ、屋久島では、自然の運動律がそのまま働いておった。自然がひとつにまとまって、つながっておった。自然は絶え間なく循環を繰り返しておったわけじゃな。

人間以外の動物や植物が自然を破壊することはない。自然破壊は人間だけの特技じゃ。人間の活動エネルギーは自然の運動エネルギーを遥かに超えておる。それが、ひとつにまとまっておる自然のつながりを分断して、循環を遮断しておるのじゃ。これが自然破壊の姿じゃ。

人間の自然破壊は、人間の欲望が抑えられん限り停まらんと思う。農業が人間の一番最初の自然破壊じゃが、工業になると自然は資源扱いしかされん。使い尽くし

て、つながりも循環も無視することになる。ワシらは、石油はあと一〇〇年で枯渇するとみておる。欲望にブレーキがかからんまま、金銭取引の温暖化議定書なんかで自然破壊に歯止めはかからんわい。

親の果樹園を引継いで、自然に任せて手を加えなかった人間がおったが、果樹園は狂うてしもうてひとつも果物ができんかった。人間が一度自然に手を加えると自然の運動律は狂うのじゃ。人間の自然に対する最高のありようは何もせんことじゃ。これを無為というようじゃ。ワシらは自然に遵うことを最善と信じておるが、人間は自然を護るなどというておる。とんでもないことじゃ。

●寄せられた投稿／MMさん

洞察に頭が下がります。ただ内容が濃すぎて普通の人には「ハアぁ??」だと思います。頭でわかったつもりでも、低次元レベルの理解だと思いますがいかが？　そこで、

A　項目を一つにする。例えば、自然保護？　ならば、保護というのは人の勝手な都合で自然破壊があるから出てくる単なる概念ではないでしょうか。自然というものを内部に見ず、客体として見るからそんなつまらない概念遊びをしているように見受けられます。

二つ目はうぬぼれからきている言いようです。天に唾する行為なのでは。
三点目は保護やら破壊の「特技」が生ずるのも、自他の区別をしたがる人の性、脳味噌だけで生きるアンバランスな物事のとらえ方からのもの。
四つ目は人の限りない欲望。
最後に「無為自然」のここちよさ。

忍頂寺の杉

これらは一つの項目でも簡単には腑に落としてもらえないでしょう。で、杉殿にテーマ一つだけ語ってもらう。
B　日常の例を挙げ、まお殿のユーモアを交えて、面白おかしく杉殿に語ってもらうと、よいかと存じます。

「場所を死守する樹」

これはスダジイというドングリを実らせる樹に聞いた話で、かれらは自分のふるさとをトコトン死守するのだそうです。動けないのにどんな手を使うのでしょうか？

そうさなあ、わしらは生まれた場所を滅多なことでは明渡さんように生きておる。樹の仲間には種を広く遠くへ運んでもらう生き方が多いがのう、わしらは生まれ育ったふるさとを死守する方を選んだんじゃ。

わしらの種は、あんたらが渋がのうて、そのまま食べられるし、うまいというておるドングリじゃ。ブナの実などと違うてな、豊作や凶作ちゅうのがないのじゃ。カケスやらネズミやらの大好物でもあるんじゃ。殆んどが奴らに食べられてしまうんじゃが、奴らも後で食べるために隠しておく癖があってのう。ほんの僅かじゃが、隠したのを忘れてしまうわけじゃな。その僅かな種が芽をだすのじゃ。わしらはそれに賭けておるようなもんじゃ。大層効率の悪い話でのう、やれ効率化じゃ、合理化じゃいうておるあんたらには考えられんことで、どうしようもないことじゃと思うじゃろうねえ。

カケスもネズミもドングリを隠すんはわしらの根元じゃ。じゃから、隠しておいて食べ忘れたドングリは、わしらの根元で発芽するわけじゃな。そしてそれが萌芽枝（ホウガシ）いうてな、小枝になるわけじゃ。この小枝がたくさん根元で育つんじゃ。これがわしらの奥の手じゃ。萌芽枝は親の幹が倒れたり、病気になって枯れたら、すぐにとってかわってグングン伸びるというわけじゃな。ほかの樹には場所を渡さんのじゃ。

それに、もうひとつあるんじゃ。それはのう、樹の上に伸びていくわしらの枝じゃ。決して重なり合わんように張り巡らすんじゃ。わしら同士は葉がこすれて傷つかんようになっておる。それでいて、隙間なく空間をふさいでしまう。わしらの樹の下は暗くなるわけじゃな。そうすると少々暗うても大丈夫なわしらのドングリだけが芽生えて、ほかの樹の子供は育たんというわけじゃ。よそ者は入れんちゅうわけじゃ。

スタジイ

無駄をなくすイタヤカエデ

人間界では「事業仕分け」が流行っていますが、樹の仲間には生まれつき徹底的に無駄を削って生きている仲間がいます。無駄をなくすることが生き方になっている代表格はイタヤカエデです。早速、イタヤカエデの長老に聞いてみました。

まずは自己紹介をしておくか。わしらの仲間の殆んどは冷温帯の落葉樹林の日陰に住んでおる。あんたら人間の言葉でいうと日陰者じゃな。周りに高い樹が多く、わしらにとっては陽の光が弱いから、生きるには厳しいが、わしらはそこを生きる場所に選んで、そういう場所に適応しておる。

先ず、枝の張り方を水平にする。葉を平べったくして葉同士が重ならんようにして下の葉にも陽が当るようにしておくのじゃ。落葉樹林には高い樹が多いからなあ。

次は、葉を開く時期じゃが、春に一斉に開いて秋まで長持ちさせる。弱い陽の光しか使えんので一気に葉を開いて光合成をするわけじゃ。落葉樹林は春先は明るいのでわしらは春にいち早く発芽する。そして、周りの高い樹が葉を開く前に光合成

をしてしまうのじゃ。

更に、日陰で生きるために葉の構造も薄くしている。葉を薄くすれば、弱い陽の光でも葉の裏側まで届くので葉を作る栄養が少なくていい。葉を維持する窒素も少なくてすむというわけじゃ。

そして、生きるか死ぬかという難局では自分から幹と枝葉を枯らす。わしらは暗くとも種を発芽させることができるし、稚樹のままで一〇年くらいは待つこともできる。しかし、もっと暗い場所だと栄養が足らなくなるので幹や枝葉を一旦枯らすのじゃ。あんたら人間が得意なリストラじゃな。地上に出ているところはリストラしても根は生きておるぞ。こうして落葉樹林が明るくなるのを待つというわけじゃ。わしらは種の休眠が苦手でのう、それで根を休眠するんじゃ。

イタヤカエデ

野生植物と栽培植物

栽培植物の親は野生植物です。ところが、栽培植物は親の野生植物とはまったく違った特徴を持ちます。

まず、成熟したときに種が自然に落ちるかどうかの違いがあります。野生植物は種が自然に落ちて、成長の条件が整うの待って発芽し成長します。種を収穫する栽培植物は種が自然に落ちては困ります。これを避けるように改良されます。

次は、種が休眠するかどうかの違いです。野生植物は成長の条件が揃うまで種は休眠します。栽培植物は種が一斉に発芽するように改良されますから休眠しないようになっています。

さらに、日照時間や温度を自分で感じ取れるかどうかも違います。勿論、野生植物にはこの能力が備わっています。自分で感じ取り、自分で適応できます。栽培植

物は人間の手で、種蒔きや間引きや成長の適期を操作されます。

そして、病気や害虫や連作障害に対する適応も違います。野生植物は病気にも害虫にも強く、連作障害も殆どありません。自然とその変化に対する適応力があります。しかし、栽培植物は人間に作り変えられていますので、病気に弱く、害虫にも負けます。農薬や化学肥料を使うので土が劣化し連作障害もあります。

もうひとつ、自己間引きの能力があるかどうかも違います。野生植物は水分と養分と太陽光の奪い合いをして競争していますから、それに負けたら消えてしまいます。強いものが残ります。栽培植物は厚蒔きしたり、密植すると共倒れになります。

栽培植物は人間が使いやすいように、よく使う部位を異常に発達させます。実を大きくしたり、茎の成長だけを促進したり、葉や根だけを特に成育するように改良します。だから、ある種の奇形植物なのです。人間の保護がないと生きられない生き物なのです。

トウダチ

「トウガタツ」といいます。花茎が伸びて堅くなること、盛りが過ぎて食べられない、役に立たないという意味です。漢字で書くと一八画、草冠に吉を書き、その下へワ冠に至と書きます。今年は特に、大根・ホーレンソウ・ネギなどの野菜が軒並みトウダチしています。ネギ坊主をつけてトウダチしているネギに聞いてみました。

そうさなあ、トウダチというのは花芽がつくことをいうのじゃ。花芽は元々葉をつくる茎の先端にある成長点なんじゃが、苗の老化や栄養不足、異常気象が原因だといわれておる。わしは異常気象のせいだと思っておる。

昼の時間が短くなったり、日照時間が少なくなったり、寒暖の落差が大きくなったりするとなあ、このままではまともに成長できんと直観するんじゃ。それで早めに花を咲かせて次世代につなごうというわけじゃな。まだ苗なのに老化を進めるのじゃ。

あんたらは、ネギ坊主を見て花が咲いたと思うじゃろうが、これはのう、異常気象

を避けて、死に急いでおるんじゃぞ。さっさと次の世代につなごうという知恵なんじゃ。

わしら野菜には気象に対する予測能力がないんじゃ。長年あんたらに種を改良されたりしてのう、野生のときに持っておった気象を予測する能力がなくなったんじゃ。だから、地温が一五度を越えたら発芽はするが、成長の段階で異常気象に適応することが出来んのじゃ。初めからやり直すしかないわけじゃな。トウダチというのはそういうことをいうんじゃ。

ネギ坊主

わしら野菜に比べると、野草は気象予測能力を持っておるんじゃ。じゃから野草にトウダチはない。種や球根が順調に成長できる気象になるまで待てるというわけじゃな。

時期の早い遅いはあっても、まともに成長するようにできておる。畑のまわりを見てみい、わしがネギ坊主をつけておるのに、ウドも、ふきもかんぞうもよもぎも、それにイタドリやセリなんかしっかり成長しておる。

気温・地温・水温

種を蒔いても芽が出ない、苗を植えても育ちがよくない、野菜づくりをしているとよくあることです。野菜はひとつの種類を年に一度か二度しかつくりません。毎年うまくいったり、いかなかったりですが、間隔が空き過ぎて成功や失敗の原因がなかなかわかりません。

種の発芽だけでもその成功条件を確かめようと思い、気温と地温と水温を一年間測ってみました。その結果を私の畑のゴボウに報告しました。次のとおりです。

単位＝℃

気温	地温		水温	
	最低	最高	最低	最高
4	0	0.3	5.9	6.2
16	10.8	18.5	9.6	13.9
18	14.1	17.3	11.4	14.3
21	15.3	20.3	15.2	16.2
31	28.3	29.8	7.7	20.9

この表は、気温が4℃のとき、地温の最低は0℃で、最高は0.3℃、水温は最低が5.9℃、最高が6.2℃だったというデータです。以下はゴボウとの問答です。

Q　野菜の種には発芽適温というのがあるの？

A　あるよ。ほとんどの野菜は15℃以上ないと発芽しないね。

Q　それは気温なの？

A　違うね。地温だよ。

Q　でも、種袋には気温が書いてあるよ。

A　地温と書いてないの？　君の調査のように発芽の条件は地温なんだよ。

Q　そうか、地温を測って15℃になったら種を蒔けばいいんだね？

A　でもねえ、15℃以上の日が5～6日は続かないとだめだよ。

Q　ということは気温が21℃になったら地温の最低が15℃を越えるから大丈夫だね？

A　そうだよ。寒暖が毎日変わると種は休眠してしまうよ。それにねえ、地温よりもっと大事なのは日照時間だよ。日照時間も調べた方がいいよ。

ゴボウ

育苗と生育の適温

キュウリ

ゴボウの意見にキュウリが反論してきました。それは「発芽・育苗のほかに、成長にも適温があるし、それに野菜の種類によっても違うよ」というものでした。早速、キュウリに聞いてみました。

まず、次ページのデータを見てもらおうか。これはわしが調べたもんじゃない。須賀工業という会社のデータじゃ。

どうかね？　どの野菜も地温で見ると、育苗適温よりも生育適温の方が低くなっているじゃろう。

	育苗適温昼			生育適温最			
	昼気温	夜気温	地温	昼気温	夜気温	最低気温	地温
トマト	24～27	15～17	18～20	20～25	8～10	5	15～18
ナス	25～30	18～20	23～25	23～28	13～18	10	18～20
ピーマン	25～30	18～20	25～26	25～30	18～20	12	18～20
キュウリ	25～28	17～20	20～23	23～28	12～15	10	18～20

どうして育苗適温の方が高いのですか？

それはのう、種は低温と日照時間が短くなると休眠するんじゃ。じゃからその休眠を打ち破らんと発芽せんのじゃ。地温を上げて、日照時間を長くしてやればいいわけじゃな。

なるほど。ゴボウは地温よりも日照時間が大事だと言ってましたね。それについてはどうですか？

そうよ。わしらが芽を出して成長するには、水と日照時間と温度と日勾配が大事な要素になっておるんじゃが、中でも日照時間が一番じゃ。

日勾配というのは聞きなれませんが、何のことですか？

ほうほう、太陽はその傾きによって光の入射が違うじゃろう。光の当たる角度のことじゃよ。日照は光の量じゃが、日勾配は光が苗に当たる角度のことなんじゃ。

野菜の生育と日照時間

野菜の生育には日照時間が一番大事だということを知りました。しかも、日照時間は光の量だということもわかりました。

調べてみると、日照時間とは直達日射量のことです。野菜に直接到達する太陽光の量なのです。日照時間というのは、太陽光が一平方メートルあたり一二〇ワット以上になる時間なのだそうです。それ以下だと日照なしということになります。

夏至は日照時間が最長になり、冬至は日照時間が最短になる季節です。一年間の日照時間は一、五〇〇～二、〇〇〇時間といわれています。

夏至と冬至が境になって、夏野菜とか、春野菜・秋野菜の区分があります。

日照時間が長いのを好むのが夏野菜です。ゴーヤ、トマト、キュウリ、唐辛子、ピーマン、人参、大根、カボチャ、キャベツ、シソ、トウモロコシ、セロリー、玉ねぎ、サツマイモ、カリフラワー、豆類などです。

日照時間が短くてもいいのが春野菜や秋野菜といわれます。生姜、春菊、ねぎ、

里芋、レタス、アスパラガス、パセリ、ホウレン草、サラダナ、イチゴなどです。もうひとつ日陰を好む野菜もあります。セリ、フキ、みょうが、ミツバなどです。

太陽光に反応するのは葉です。その葉が緑色なのは光合成のために葉緑素を蓄えるからです。葉は赤と青に反応して成長します。葉緑の体色素は赤色光と青色光を吸収します。赤色光に反応するのが夏野菜で、青色光に反応するのが春野菜や秋野菜です。

夏野菜は長日性植物・短夜植物といわれ、春野菜・秋野菜は短日性植物・長夜植物といわれます。短夜というのは花芽の形成には短い夜間でいいということです。逆に長夜とは花芽の形成に連続した長い暗期が必要だということです。

花芽の形成に最低限必要な暗期の長さがあります。長日性の大根が一〇～一一時間、ホウレン草が一三～一四時間です。暗期がこれ以上になると花芽ができます。短日性の大豆が一四～一六時間、コスモスが一二～一三時間、キクが一四～一四・四時間です。暗期がこれ以上ないと花芽を形成しません。

ところで、太陽の入射エネルギーが光合成に利用されるのはたったの五％だそうです。何とも不思議なことです。

2　植物はエネルギー源を自前でつくる

植物は生きるためのエネルギー源であるでんぷんを自前でつくります。太陽の光エネルギーを電気エネルギーと化学エネルギーに変換して、空気中の二酸化炭素と水からでんぷんをつくります。これが光合成という炭酸同化作用です。水が分解される過程で酸素が発生し、二酸化炭素が固定されて炭水化物になるわけです。

動物である人間はほかの生き物の生命を糧にしてしか生きられません。その生命に対する感謝と、少なくとも可能な限り自給自足に努める使命に目覚めなければならないという教えなのでしょう。

自給自足

タンポポは国産在来種が三六種もあります。ところが、戦後欧州原産のセイヨウタ

ンポポが帰化して在来種を駆逐しています。そのわけはセイヨウタンポポが受粉して種子を作らなくてもいい単為生殖（無性生殖）だからです。昆虫がいない都会でもどんどん殖えます。在来種は有性生殖なのでセイヨウタンポポには負けてしまうのです。

劣勢ではありますが、在来種の和タンポポに、自給自足について聞いてみました。

私らタンポポのような植物は光合成によって完全な自給自足で生きています。私らは太陽の光と水と二酸化炭素から葉緑体の中にデンプン（炭水化物）を作ります。このデンプンを糖に換えて、体を成長させ、呼吸をします。勿論、私らが生きていくためには窒素やリンやカリウムも必要ですが、これらは土の中にあるものを吸収します。

和タンポポ（上）と西洋タンポポ（下）

光合成では二酸化炭素を吸収して酸素を放出します。ところで、私らも呼吸をします。人間と同じように酸素を吸収して二酸化炭素を放出します。普通、光合成による酸素放出量は、呼吸による二酸化炭素放出量より多いので、私らは成長できます。乾燥や低温や病気などのストレスを受けると二酸化炭素放出量が多くなる場合がありますが……。

人間の自給自足は、自然の仕組みを変えて人間向きの穀物や野菜や果物を恣意的に作ります。その意味で人間の農耕は自然破壊です。私らは自然にあるものをそのまま使う自給自足です。だから、私らの自給自足は自然の仕組そのものです。

人間界でも、日本では一九六五年（昭和四〇年）まではムラがあって、どの家でも衣食住について何らかの自給自足をしていましたね。自給自足といっても自分の家で何から何まで出来ませんので、その過不足を補うために贈答の習慣がありました。相手が作っていないものを融通してあげるというしきたりですね。そして、人手のいる仕事を一緒にしてあげる「結い」や、共同で仕入れた方がいいものを一緒に買ったりする「講」がありました。自給自足はムラというまとまりを豊かにする仕組をもっていました。

嫁にいくとき持っていったトチの木

宮本常一さんの「塩の道」という本に、トチの木は娘が嫁にいくときに持たせてやったと書いてあります。

それは岐阜県と福井県の県境にある穴馬村での話だというので、その村のトチの木に訊ねました。

本当じゃ。このあたりじゃトチの木は一本一本持ち主が決まっておってのう、娘を嫁に出すときに持たせたもんじゃ。嫁入り道具というわけじゃが、トチの木は実際に持っては行けんから所有権を譲ったわけじゃな。

嫁にいった娘は、トチの実が落ちる九月になると実家へ帰ってきてのう、トチの実を拾って嫁ぎ先へ持って帰るんじゃ。トチの木は五月から六月になると白い花を咲かせるんじゃが、娘はその頃にも実家へやって来てトチの木の下草刈りをするんじゃ。トチの実が拾いやすいようにしておくわけじゃな。

この慣わしはのう、娘に子供ができると、その子供にも引き継がれるんじゃ。というても、これは女の子に限られとる。女の子が嫁入りするときに、母から娘にトチの木の所有権が譲られるんじゃ。

なんでこんな風習があるかいうとな、トチの木は飢餓を救えるからなんじゃ。トチの実にはでんぷんが豊富でのう、それを加工した栃餅があるのはあんたらも知っとるじゃろう。トチの木を持っとるいうことはな、飢餓を切り抜けられるちゅう安心があったわけじゃな。

これに似た話は海のタコにもあるようじゃ。タコ穴もすべて個人持ちだったちゅうからな。じゃからタコ穴も母から娘へ嫁入り道具のひとつとして渡されたんじゃな。山形県や新潟県の佐渡、それに能登半島や広島県の三原あたりの習俗だそうじゃ。食用になるもんはすべて生活習慣の中に取り入れて、そういう文化が形成されておったんじゃな。

トチの木と実

植物の食べ物

動物は生き物を食べます。植物の葉や茎や実や根を食べます。ほかの動物の肉を食べます。動物は生き物の生命を自分の生命に換えます。

植物は何を食べるかというと、生き物の死体です。落ち葉や朽ちた木を食べます。動物の糞尿や死体を食べます。生き物の死体を分解して自分の生命に換えます。

これを聞いていた米が突然怒りだしました。こうです。

わしらはあんたら人間に食べてもろうておるんじゃが、実はなあ殆どの人間はわしらが死んでから食べておるのじゃ。生きておる間に食べてほしいもんじゃのう。わしらは玄米で保管されても、一年半くらいで黄色うなってのう、臭うなるわい。それにのう、玄米には虫がつきよる。黴が生える。そして腐るんじゃ。

これはのう、化学肥料やら農薬を使うんでなあ、わしらは虫や黴や腐食に弱うなってしまうのじゃ。それに、わしらの収穫にコンバインを使うじゃろう、あれでなあ強引にむしりとって脱粒するとなあ、わしらは疲れてしまうんじゃ。

米の天日干し

おまけに熱風で急速乾燥とやらをするじゃろう、これではわしらは生きてはおれん。あんたらはその玄米を白米に精米するじゃろう。これで完全にわしらは死んでしまうわな。あんたらはわしらを殺してから食べておるわけじゃ。

わしらを刈り取ったら、稲架（ハサガケ）してのう、優しく脱穀してほしいもんじゃな。天日でゆっくり乾燥させてのう、モミをつけて保管してほしいもんじゃな。こうしてくれたら、虫はつかん。ネズミにだけ気をつけてくれたら大丈夫なんじゃ。

これでのう、わしらは一〇年は生きておるぞ。しかもなあ、二〜三年は新米並みの味じゃ、栄養分もそうじゃ。食べるときは玄米にして食べてほしいもんじゃな。白米にしたらわしらは完全に死んでしまうのじゃ。あんたらは生き物の死体を食べる生き物じゃないからのう。

ウサギは薬草を食べている

私と同じように無農薬・有機栽培の百姓を一〇年以上続けている畏友が、草刈をしていて野ウサギの巣を壊してしまい、赤ちゃんウサギを保護しました。

一羽は傷ついて死に、もう一羽を人の手で育てようとしましたが、これも死なせてしまいました。

野ウサギは穴を掘って巣をつくりません。安全な藪の中に営巣します。親が母乳で育てます。生後三週間で乳離れして親と同じものを食べます。親の母乳が断たれて死んだのです。

野ウサギは野草や木の葉や樹皮を食べます。稀に昆虫を食べる種類もあるようですが、大半は草食動物です。一〇の薬効があり十薬という異名を持つドクダミに、ウサギのことを教えてもらいました。

野ウサギは私らドクダミをよく食べるわ。ほかにオオバコやタンポポ、シロツメ

ドクダミ

クサ、クローバーなども好んで食べるのよ。みんな薬草なのね。整腸・解毒・抗菌・利尿・動脈硬化予防・湿疹やかぶれ、こんな薬効を持つ薬草が主食なのね。薬草だけど栄養価は低いのよ。でもねえ、野ウサギには栄養価の低い食べ物を、高性能な消化管で加工して栄養価を上げる力があるの。

盲腸が消化生理作用で重要な役割を果たしているのよ。実はねえ、野ウサギの盲腸には細菌叢が住み着いていて、硬い丸い糞と柔らかい糞をつくるの。硬い丸い糞は見たことあるでしょう？　柔らかい糞なんて知らないでしょう？　それはそうよ、野ウサギが食べてしまうからよ。盲腸糞栄養ってわけね。これを食べていると、ペットと

タンポポ

違って肥満にはならないわ。ウサギの尿と糞は人間と違って同じところから出るのだけど、そこに口をつけて盲腸糞栄養を食べるわけね。この盲腸糞ね、二四時間いつでも出るのよ。

そうそう、赤ちゃんウサギは人工の乳ではダメなのよ。あなたの友達、牛乳か何かを飲ませたのでしょう？　可愛そうなことしたわね。野ウサギの母親はね、赤ちゃんが生まれると葉の切り口から白い乳液を出すタンポポをよく食べて乳の出をよくするのよ。北海道の牧場では牛にタンポポを食べさせているそうよ。

3　植物は自己修復能力を持つ

生き物が生命を維持するために最も必要なものが自己修復能力です。植物は抜群の自己修復能力を持っています。茎と葉と根のどこが失われてもすぐに修復できます。特に、茎や根はその僅かな一片が植物の全身を再生してしまいます。一片の小枝が木になり、一切れの根が草になります。挿し木や挿し芽は植物の自己修復能力を利用したものです。サツマイモは茎を植えて育てます。

動物の自己修復能力は植物の比ではありません。トカゲは尻尾が切れてもすぐに生えてきますが、その程度までです。人間はトカゲにも及びません。

人間の体の器官は脳・目・肺・胃・筋肉・血管・骨というように多様ですが、そのどれかが人間の体全体を再生することはできません。それは人間が異なる器官の組み合わせで体ができているからです。

植物は同じ器官を繰り返し使って体づくりをします。しかも、植物は一生体づくりを続けます。植物は体の一部の機能が失われると、残りの部分が変化して自動的

に壊れた部分を治して全体の機能を取り戻します。生まれる前の胚の段階で体が出来上がっている人間とは全く違っています。

生態系の起点にある植物、抜群の自己修復能力を持つ植物、その植物に対して人間にできることは足るを知ることであり、自然の循環を害わないということなのだと思います。

生け花

花屋の前を通ったらスイセンに呼び止められました。

あの～、ちょっと聞いてくれませんか。わたしは、昨日まで郊外の花畑で育てられていたんですが、刈り取られて今ここにいます。とても悲しい思いをしています。

人間は、わたしらの根を切って花を売り物にしますね。どうして花畑でそのまま見てくれないのでしょうねえ。わたしらは大概仲間と一緒に群生しています。その群れて揺れるさまを見てもらう方が何倍もきれいなのにねえ。

人間は華道とかいうて、生け花の方がきれいだと思っているのでしょうね。でも生け花は不自然です。それにわたしらスイセンには鱗茎に毒がありますから、切らない方が安全ですしねえ。鱗茎がニラや浅葱に似ているので間違って食べて死んだ人もいるんですよ。

華道の師匠は、「蕾は上に花は下に生けろ」といいます。花も蕾も葉も茎も、「ひとつひとつを際立たせろ」ともいいます。見た目を「三角形にしろ」とか、「上下のバランスは一〇対七にしろ」という言い方もします。そして、「左右非対称にするときれい」だといいます。生け花はきれいに見せる加工技術なんですね。蕾が上で花が下というのは自然の状態に近づけろということです。それならわざわざ切って生ける必要はないでしょう？　根ごと花瓶に挿せばすみます。

ひとつひとつ際立たせるとなると、これは自然ではありません。葉は太陽の光を求めます。花は虫を呼びます。茎は花や葉を支える仕事をします。それぞれ役割が

違います。みんな際立ってはいません。

三角形に揃えろとか、上下を一〇対七にしろとか、左右非対称にしろというのも不自然な加工です。元々わたしらスイセンは人間に見てもらうことなど考えていません。スイセンの子孫を残すために光合成で生命力をもらい、虫を呼んで受粉を助けてもらいます。

わたしらはどこを切られても水と太陽の光があれば生きられます。根でも茎でも葉でも、どこからでも全身を再生することもできます。生け花はわたしらの、この再生能力を室内に取り込んだという人間もいるようです。

でも生け花は元々供花だったようですよ。お坊さんが仏さんを弔うときに、挿し花をしたのですね。華道も室町時代に京都のお坊さんが考えたと聞いています。

●寄せられた感想／KEさん

ワンガリ・マータイさんから、二〇一〇年二月来日された時の講演会で「ともいき」という言葉を教えてもらった。「ともいき」という言葉は、浄土宗の宗祖・法然上人が八〇〇年前に、教えの中でも説いていると友人のKさんからメールをもらった。

マータイさんは日本語の「もったいない」という言葉に感銘を受け、後に国連女性地位委員で出席全員と「もったいない」を唱和した。二〇〇四年にノーベル平和賞、二〇〇九年に旭日大綬賞を受賞したとフリー百科事典に出ている。

「ともいき」とは「共生」のことである。「人は一人で生きているのではない。家族をはじめとして、隣近所、町や村の中で多くの人々と関わり合いながら生きているのだから、その関係を大切に助け合いながら生きましょう」ということになるとKさんは書いていた。

佐藤眞生さんは「芸術の森ニュース」最新号で「歴史を忘れた民は滅びる」のタイトルで「経済だけをとってみても、自給自足の経済があり、それを補う贈答と助け合いの経済があり、そして交換のための貨幣経済が加わって均衡している。これが増殖だけを目的にした貨幣経済一極になって、腐敗と悪の温床となり崩壊する」と書いておられた。

佐藤眞生さんは「バーズアイ」最新号の「植物との対話」シリーズ「生花」の中で「花屋の前を通ったらスイセンに呼び止められました。私は昨日まで郊外の花畑で育てられていたが、刈り取られて今ここにいる。とても悲しい思いをしている」で始まるエッセイを書いておられた。

「生花はきれいに見せる加工技術です。ひとつひとつきわだたせるとそれは自然ではない。

葉は太陽の光を求めます。花は虫を呼びます。茎は花を支える仕事をします。それぞれ役割が違います」と書いておられた。これぞ「ともいき」の姿そのものではないかと、大いに共鳴した次第である。

日本画教室では花の絵を描いている。先日、教室仲間のFさんから「水耕栽培のヒアシンスの花が終わると毎年、球根を土に埋めておく。今年も一輪二輪と花を咲かせてくれました。忘れていたのに～！　いつの間にか「春だよ」とサインを送ってくれる。かわいいですね」とヒヤシンスのスケッチを添えたハガキをいただいた。

ご近所の白木蓮を先日スケッチした。スケッチを見た知人のMさんが返事の手紙に「木蓮が自分を描いてとポーズをとっているようだ」と書いてくれた。植物であれ、人であれ、生き物は一人では生きられない。今、日本には不平不満が充満している。日本には古来、すばらしい生き方の知恵がある。日本人よ、自信を持てとマータイさんも教えている。

スイセン

キュウリの嘆き

いつも親しくしている畑のキュウリに、ふと人間のことを聞いてみようと思い立ちました。それは人間がキュウリをはじめ野菜にいろいろ手を加えるからです。キュウリは雌雄異花ですが、雄花が咲かなくても実を結びます。ここは強い雌花に聞くのが妥当でしょうね。

わたしらは四〇〇〇年以上前からあなた方に食べられています。出はインドともエジプトともいわれています。エジプトのことはキリスト教の旧約聖書に載っているそうですよ。

あなた方はわがままだから、毛をとってツルツルにせよとか、イボをとれとか、苦味をとれとうるさく迫ります。ザラザラなのは虫よけだし、イボは水分がほしいのでそうなっているし、苦味はわたしらの生命力の灰汁（アク）なんですよ。みんなわたしらには必要で、意味のあることなのに、勝手にいじくってしまいます。取ってしまいます。野菜なんだから仕方がないと諦めてはいますが……。スーパーで販売して

いるキュウリの九〇％はツルツル・キュウリです。

それに病気を減らして、出来のいい、まっすぐなキュウリをつくるために、わたしらの茎をかぼちゃに接ぎます。主に、同じ畑で続けてつくるためなんですよ。接木栽培は、日本ではスイカが一番早くて昭和のはじめでした。私らは二番目で昭和三〇年の後期です。今、スーパーで売っている九〇％はこれですよ。これは胸を張って〝私、キュウリです〟とはいえません。キュウリじゃないんですからね……。

キュウリは初夏の野菜と決まっていましたが、今一年中あります。土と太陽の光と水ではなくて、ビニール・ハウスの中で温度と湿度の管理をされて大きくなります。これも私にとっては恥ずかしいことで、〝私、野菜のキュウリです〟といえません。野菜ではないんです。

多分、本当に土と太陽の光と水で、ビニール・ハウスなどを使わずに作っているキュウリなら、水分があって、噛み心地がシャリシャリする筈ですね。それに苦いどころか甘みがあります。今のあなた方が食べているキュウリは仮の昧ですよ。でもねえ、あなた方のまちで三歳の女の子が四葉（スーヨウ）キュウリを生でパリパリ食べているのを見ましたよ。

大根の戒め

大根は最も取りつきやすく、しかも最も難しい野菜です。〝大根一〇耕〟などといいます。大根を作るなら畑は一〇回耕しなさいということです。その大根が最近とても怒っています。

この二〜三年は異常気象じゃ。今年になってからようやくあんたらの気象予報士が異常気象と言い出したが、今に始まったことじゃあない。三年ほど前から、種が芽を出さんような地温が続いておる。わしらの発芽適温はなあ、二〇℃から二五℃くらいじゃが、今年の八月で地温が二九℃もあるんじゃ。これでは地温が高すぎて種は芽を出せん。

異常気象とは別になあ、種が殆んど外国産になっておるわ。昔はあんたら百姓が自分で種を取っておった。収穫期にわしらの中から百姓がいい大根を残して別の畑に植えかえてなあ、花が咲くまで待って、時間も手間もかけて種をとったもんじゃ。それを種屋に任せるようになって、種は買うものになってしもうた。今ではその種

屋が外国にみんな預けてしもうてなあ、日本産の種はのうなった。種の自給率は穀物も含めると二八％じゃと。わしら大根もいれて野菜だけみると白給率は一〇％じゃ。これが二〇〇六年のことじゃから、今ではもっと低くなっておるわ。

外国産の種には一代交配種（Ｆ１）というてなあ、一代目は両親のいいとこどりをして、形揃いのいい、収量の多い、日持ちのする、連作障害に耐える作物ができる。ところがその種を翌年蒔いても性質のバラバラなものしかできなかったり、発芽さえしないんじゃ、しかも、一代交配種は肥料や殺虫剤とセットになっているものが多い。それらを一緒に使わないと発芽しない代物じゃ。勿論、味や香りやコクや栄養は二の次になっておるから、おいしいとはいえん。

もっと腹が立つのは遺伝子組替種子（ＧＭ）じゃ。食用でない遺伝子組替種子が食用に混入する事件があったじゃろう。除草剤耐性のある遺伝子が雑草に転移した例もある。除草剤に負けない遺伝子を野菜に入れたら、これが雑草に移ったということじゃ。これはどうしようもない、取り返しのきかない事態なんじゃ。

ナラ枯れ

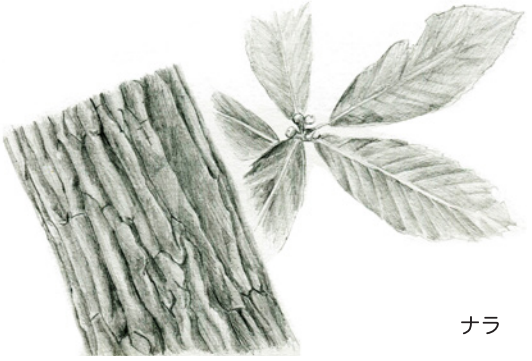
樹木や野草も病気にかかります。しかも人間が原因で病気にかかることがままあります。その代表的な例がナラ枯れです。ナラ枯れはカシナガキクイムシが運んでくるナラ菌によっておこります。早速、当のナラの老木に聞いてみましょう。

ナラ枯れの直接の原因は確かにカシナガキクイムシじゃ。だがのう、ナラ枯れにかかる木は決まっておる。それはなあ、あんたらが伐採せずにほったらかしにして太くなった年寄りの木じゃ。幹の大い老木はなあ、カシナガキクイムシの格好の繁殖場所になるんじゃよ。

ナラ枯れはなあ、わしらの細胞が死んで、枝や葉に水分や養分が行き渡らなくなって枯れる。枯れた木をまたあんたらは放置するわけじゃな。そうすると、ここにまたあの虫がやってくるんじゃ。そしてそれがまた拡散するんじゃよ。昔といってもそう遠い昔じゃあないが、あんたらは里山じゃいうて、わしらをよう伐採して薪に使っておった。その里山は今じゃ用がのうなったいうて、あんたらはほったらかし

にしたんじゃ。里山はあんたらが一度手を入れたんじゃから、ずーっと手を入れんと荒れてしまうんじゃよ。それそれ、熊やら猪もまちへ出てくるじゃろう。あれもあんたらの責任じゃよ。

それになあ、このところの猛暑じゃ。雨も少ない。これがまたナラ枯れを進めるんじゃよ。日本はもう日本海側も太平洋側もナラ枯れでいっぱいじゃ。二三の府県で、二五一一ヘクタールに広がっておるがな。どうしてくれるんじゃ。



ナラ

考えてみろや、猛暑じゃ、少雨じゃいうても、これは純粋な自然現象じゃあない。いってみれば、あんたら人間の使うエネルギーがじゃ、自然のエネルギーを上まわっとるんじゃよ。それで自然の構造が歪んでしまうんじゃ。何でもかんでも、楽をしようとしてなあ、拝金主義で、自然を壊してしもうとる。

ナラ枯れひとつとっても、解決しようと思うならわしらの一本一本に手当てをせにゃならん。あんたらはそうせんとかんところまできとるんじゃ。

植物は何故長寿か？

植物の世界一最高齢はアメリカのイガゴヨウマツで、四、八四四年だそうです。日本一は屋久島の大王杉で三、〇〇〇年といわれています。動物では一五二年のゾウガメが最高齢だそうです。人間の最高齢は一二二年です。イガゴヨウマツの仲間、日本のゴヨウマツに聞いてみました。どうして植物は長生きなのかを。

そうさなあ～、植物と動物では体のつくりが違う。植物の体の器官は茎と葉と根の三つだけじゃ。花もあるが、これは葉の変形なんじゃ。動物はというと、脳・目・肺・胃・筋肉・血管・骨といった具合にたくさんあるじゃろう。体の器官の数は総合病院の診療科目並みじゃな。

動物はのう、体の構造が生まれる前の胚の段階で殆ど完成しておる。だから、生まれた後で発生が続くことはないんじゃ。ところが、植物はのう、生きている間細胞をつくり続けるんじゃ。だから、植物の発生は一生続くわけじゃな。その方が長生きなわけじゃ。

植物の細胞はのう、すべてが次の世代に遺伝子を伝えるようにつくられておる。老化がおこらんのじゃよ。それにのう、木の中では針葉樹が長寿じゃが、針葉樹の樹脂細胞はなあ、固い上に、防虫効果もある。それで、広葉樹よりも長生きなんじゃな。

その上じゃ、植物は茎からでも、葉からでも、根からでも、体全体をつくることができる。木の枝を挿し木したら木に育つじゃろう。あれじゃよ。どの器官からでも植物全体を再生できるんじゃな。動物にはこの能力はない。脳が病気になっても、脳は正常な脳をつくれんじゃろう？まあ、怪我を治したり、折れた骨をつなぐことぐらいしかできんじゃろう？　トカゲの

イガゴヨウマツ

尻尾切りというのもあるが、せいぜい尻尾をつなぐ程度の再生能力しかないわな。

自然に対する適応の仕方も違うんじゃが、植物は芽生えたところを動かずに、一〇〇％適応できる。生活様式や姿を自然に合わせる。動物は自分に合う自然を選んで移動するが、なかなか一〇〇％合う自然はない。適応できないことがあるわけじゃな。

●読者からの投稿／KEさん

植物はなぜ長寿か？　興味深く拝見しました。植物の話を知れば知るほど植物の偉大さを実感します。四、八八四年生きているイガゴヨウマツの話にはたまげました。なぜ、動物はせいぜい一二〇年しか生きられないのか。生きながら生成発展し続けていく植物。生まれる前に各器官が完成されてしまう動物。そこに秘密が隠されていた。もう六〇になった、もう七〇になったと自分を勝手に「追い（老い）」込んでいる人がなんと多いことか。特に男にそれが多い。

植物との対話が本になるのを楽しみにしています。

苗屋から私の隣の畑へ買われてきたキュウリが何やらブツブツ言ったので耳を傾けてみました。どうやら、畑の主のことらしいのです。

「あのねえ、オイラはキュウリの顔をしてるけど、本当はキュウリじゃないんだよ」

キュウリじゃないですか、どこから見ても。

「キュウリに見えるじゃろう？　だがなあ、オイラの根はカボチャなんだよ。カボチヤに接ぎ木されてるんじゃよ。キュウリに非ず、カボキュウよ」

へえ～、どうしてですか？

「キュウリは連作がきかないだろう？　連作できるようにカボチャの根を使うんじゃよ。それに、病気にも弱いんでなあ、それでカボチャに接ぐわけさ」

それでなんでまたご主人さまを悪く言うのですか？

「それじゃよ、オッサンは無農薬じゃ、有機栽培じゃと言ってるじゃ

ろう。オイラのような接ぎ木キュウリは、農薬も化学肥料もたっぷり使わんと出来んのじゃ。無農薬・有機栽培はオイラを使ったらウソになるんじゃ」

ははあそうですか？　すると接ぎ木苗だけじゃなく、苗屋の苗はみんな無農薬・有機栽培にはならないのですね。

「そうなんじゃ、日本古来の野菜を自家採種して使わん限り、無農薬・有機栽培とは言えんのじゃ」

「それになあ、今は野菜の種の八割以上は外国産じゃよ。これなんか農薬漬け・化学肥料漬けだぞ」

「ひどいのはのう、ある化学肥料と一緒に蒔かんと芽が出んものさえあるんじゃ。おまけにほとんどが一代交配種ゆうてなあ、種を採っても芽が出んものもあるんじゃ」

そうですか？　外国産の種を使うと無農薬・有機栽培にはならないというわけですね。

「そうそう、あんたからオッサンによう言うといてえな。間違ったらいかんぜよ」

4　植物は必要なモノを呼ぶ

植物の殆どは有性生殖ですから子孫を残す方法は受粉です。自前で受粉できる植物もありますが、大半の植物は受粉の仲人を必要とします。子孫存続という生存戦略に必要な仲人を植物は呼び寄せる能力を持っています。

ソテツや銀杏や松などの針葉樹は種がむき出しの裸子植物ですが、受粉のために風を呼びます。この風媒植物は地味で目立たず、花粉はサラサラして風に乗りやすくなっています。松のように花粉に浮き袋がついているものもあります。

マツモやセキショウモのような水生植物は受粉の仲人に水を呼びます。水媒植物もあまり目立たない体になっています。

ハチやチョウやアブなどの虫を受粉の仲人にしている植物もあります。種が子房で包まれている被子植物の多くが虫を呼びます。虫媒植物は花がきれいで、蜜を出したり、香を発したりして虫を誘います。花粉は虫につきやすいように粘り気があります。

鳥を呼ぶ植物もあります。ヤブツバキやザクロです。メジロやヒヨドリが受粉の

仲人をします。鳥媒植物も虫媒植物と同じ特徴を持っています。ほかに、コウモリを呼ぶサボテンやバナナ、カタツムリやナメクジを呼ぶユキノシタやオモトがあります。

求めるモノにきてもらうには魅力がなければなりません。そして、その魅力は「いま、ここに、生きている」というどっしりとした生き方なのかもしれません。

雌雄異株と雌雄同株の草の話

植物には雌雄が同株のものと異株のものがありますが、キクの仲間のフキは雌雄異株です。そのフキに「オスとメスって何ですか?」という質問をしてみました。

同じ草の仲間にも、私らフキのように雌雄異株のものと、ツユクサのような雌雄同株の草があります。ひとつの株に雌花と雄花が一緒に咲く草と、雌花の咲く株と

雄花の咲く株が違う草があるということです。

オスとメスは生物学では、最初から別々だったとか、どっちかが先だったなどと論争されていて、ちょっとやっかいな問題ですね。

系統学的にいいますとね、最初の原核生命はメスです。オスはメスから派生したといわれています。

ツユクサなどは、ひとつの株に雌花と雄花を咲かせますから、原核生命でいう雌雄の原型にあたります。

人間界でも古事記などを読むと、最初の神さまは一人神で無性生殖です。次に現れるのは夫婦神で有性生殖ですが、なんとこれが兄と妹になっていて、生まれてくる子は奇形児ですね。それで近親婚はよくないということになって、最終的には血縁関係にない夫婦神

フキ

が現れてまともな子が生まれます。何か示唆的だと思いませんか？

また、神さまが死ぬと、その体がバラバラにされて、いろんな植物に生まれ変わりますね。体の部位が植物になるというのも無性生殖ですから不思議な感じがします。

話は少しそれますが、天使と悪魔はどちらが先という議論もあります。両論ありますが、正しくは天使が堕ちて悪魔となるといわれています。天使が欲望に負けて、堕落して悪魔になるというわけです。

なんといいますか、原型はメスであり、天使なのでしょうね。ですから、メスとオスは一体ではないかと思うのです。あるいは生命の原型はメスだといった方がいいのかもしれません。

どちらにしてもメスとオスは厳格に区別すべきものではないのかもしれません。特に、ツユクサのように雌雄同株の場合にはメスとオスは常に一体であり、区別する必然を感じないからかもしれません。

畑のキャベツが、この寒さで結球が遅れているので声をかけてみると、「モンシロチョウの成長が狂うので、今年は困ったことになりそうだ」と低い声でうなっていました。「しかし、モンシロチョウはキャベツを喰い荒らすから、その方がいいのではないの？」と問い返してみました。すると、キャベツは意外なことを言います。

野菜づくりをしている人間なら虫の食草や食樹くらいは知っているでしょう？これはねえ、昆虫が幼虫のときに食べる植物なのね。しかも、昆虫は決まった草や樹しか食べないのよ。例えば、モンシロチョウの幼虫は、最初は自分の卵の殻を食べるのよ。蛋白質が多いからね。脱皮すると、今度は脱いだ皮を食べる。そしてアオムシになってわたしらの葉を食べるわけね。葉を食べられるからといっても、私らキャベツが困るかというとそうではないのよ。

どうしてかって？　不思議でしょう？　キャベツは虫に対する毒性を持っていてね、殆どの虫は私らを食べないのよ。でも、モンシロチョウは毒に対する耐性を持っ

ているから私らを食べても大丈夫なわけね。だから、私らがモンシロチョウを選んでいるようなものなの。

　畑のキャベツの畝をみればわかるでしょう？　軒並み私らの葉が食べられてるわけじゃないでしょ？　成育のよくないキャベツが食べられているのよ。私らはキャベツ同士が太陽の光をお互いに取り合っていて、それに勝ったキャベツがしっかり大きくなるわけね。その競争に負けたキャベツが食べられるのよ。何故って、そういうキャベツは日陰にあるので、アオムシは直射日光が嫌いだからそこがいいのよ。アオムシはしっかり結球したところへは入ってこないし、広がった葉の裏が好きなのよ。好きというより、天敵の鳥やカマキリやトンボやアシナガ

バチから身を隠すのにいいからね。

それにねえ、アオムシはたくさん糞をするのだけれど、この糞が私らの滋養になるのよ。キャベツは花粉を飛ばすことはないけど、菜の花はモンシロチョウに花粉を運んでもらってるので、子孫を絶やさないためにもモンシロチョウはありがたいわけね。

●寄せられた投稿／KEさん

「蓼食う虫も好き好き」という言葉がある。広辞苑で引いたら、「苦い蓼を食う虫もあるように人の好みはさまざまである」と出ていた。佐藤眞生さんが地域広報誌のバーズアイ最新号に「キャベツは虫に対する毒性を持っていて、殆どの虫はキャベツを食べない。モンシロチョウは毒に対する耐性を持っているからキャベツを食べる」と書いておられた。

キャベツはモンシロチョウの幼虫に食べられてさぞ困っていると思いきや、佐藤眞生さんによると、キャベツがモンシロチョウを選んでいるというではないか。筆者は頭から虫が野菜を選んでいると思い込んでいた。

生育の良くないキャベツが虫に食われているそうだ。キャベツ同士で太陽の光を巡って互いに獲り合っている。青虫は日陰を好む。日光を浴びてしっかり結球したキャベツには青虫は入っていかない。日陰のキャベツは青虫に食われるというのである。自然の妙とはこういう世界のことをいうのだろう。

「蓼食う虫も好き好き」の言葉の由来をヤフーで調べてみた。中国南宋時代の随筆集「鶴林玉露」にある〝氷蚕は寒さを知らず、火鼠は熱さを知らず、蓼虫は苦さを知らず、ウジ虫は臭さを知らず〟といわれ、日本では江戸時代の狂言の台本「縄綯（ナワナイ）」に〝たでくうむしもすきずきと申すが……〟とある、と出ていた。

「毒にも薬にもならない」という言葉がある。毒ということでは大いに飛躍するが、先日「ダーウィンが来た」という番組をみた。猛毒フグに臆病な側面があることを紹介していて面白かった。フグが産卵のために川を上る姿も見せてくれた。ただ、フグを食べて命を落とす魚もいる姿も紹介していた。

こちら経済学である。経済の世界は食うか食われるかの厳しい世界だとよくいう。植物や魚の世界をみていると子孫を残すために彼らの方がよっぽど真剣に日々の生活を送っていることを教えてくれる。

今朝、テレビ東京の番組「モーニングサテライト」を見ていたら、番組の最後に「今日のキーワード」として「少子化対策」というパネルを画面に写してさるコメンテーターが力説しておられた。

本来人に教えられて子孫を残したり残さなかったりするものではない。「少子化対策」とバカの一つ覚えのように取り上げられている。思い上がりもほどがあると常々思っている。

いただきものの命であることを忘れて、自分で子供を作るとか作らないとかいった言葉を平気で口にする人がいる。それこそ天に唾する言葉であろう。以前、虫をむやみに殺さないでという文を書いたことがある。日本の企業にも昔は企業の虫といわれる人が大勢おられた。それが経費節減の大義名分に次々ブルドーザーで押しつぶされている。

不景気を嘆くヒマがあるのなら、このような時代であればこそ、蓼食う虫も好き好きという諺に思いを致して欲しいと思う次第である。

シイタケの語り

シイタケはいまから四年ほど前までは五〜六月、十〜十一月が収穫期だったのに、収穫期が滅茶苦茶になっています。私が標高三〇〇mの山地で栽培しているシイタケにその訳を聞いてみました。

そうさなあ〜、原因は異常気象じゃよ。特になあ、寒暖が頻繁に起こり、その落差が大きいとワシらは休眠するんじゃ。一旦休眠するとなかなか目を覚まさんのよ。

雷が落ちた場所にはキノコがたくさんできると聞くけど、ショックがないと目覚めないの？

そうそう、雷のショックは効くねえ〜。あんたも時々ワシらのホダ木に水を掛けて、小槌でコンコンたたくじゃろう。あれもショックで目覚めさせる方法なんじゃ

シイタケのホダ

な。栽培農家じゃ電気ショックで増産効果をあげているところもあるようじゃ。

私はものの本に、キノコは日陰で湿ったところがいいと書いてあったので、そうしているけど、それでいいんじゃね？

まあ、それでいいともいえるが、本当はなあ、キノコだってお陽さんがいるんじゃ。ワシらが胞子を飛ばす場合じゃが、明るい開けたところがないと困るんじゃ。日陰というてもな暗い場所じゃモヤシみたいになってしまうんじゃよ。

胞子を飛ばすってあんたは風媒なの？

そうじゃよ。知らんかったんかい。風を呼んで胞子を散布するんじゃよ。というても、昆虫なんかを呼ぶ仲間もおるがな……。

ところで、縦に割けるキノコは食べられるとか、毒キノコは色が派手だとか、虫が食べるキノコは人間も食べられるなんて聞くけど本当なの？

そんなことは迷信じゃよ。信じてはいかん。キノコの見分け方は難しいんじゃ。キノコはカビと一緒で微生物じゃから顕微鏡で見んと本当はわからん。あんたらが生死をかけてわかったことが離農や核家族で伝わっとらんからなあ。あんたらの経験知が断絶しとるのは寂しいことじゃな。

5　植物はすべてを受け容れ自在に生きる

植物は動かずにすべてを受け容れます。動物に食べられたり、傷つけられたり、利用されたりします。天災によって被害を受けることもあります。植物はそれらのすべてを受け容れます。耐えたり、忍んだり、反対したり、抵抗することはありません。これは自然に文句なしに遵う生き方です。自然界のあらゆる生き物の自在な生き方を自分の生き方にするありようです。

すべてを受け容れるということは善悪や是非を越えています。人間は価値観や信仰や考え方の違いで相手を拒否しますが、植物はそれをしません。自然の分身として依存し合って存在しているのだと思います。違いではなく共通点をみつけることに本質があるという教えなのだと思います。

ふるさとって何？

一生どこへも動かない

いつも同じところに生えている常緑の多年草・ヨモギに聞いてみました。「あなたにとって、ふるさとって何ですか？」

ふるさとねえ～、不思議な質問ですねえ～。私にとってふるさとなんて言葉はありませんよ。だって、生きている場所はたったひとつだし、一生どこへも動かないのですから。

人間がことさらふるさとって言うのは、生まれてから動きすぎるからでしょうね。生まれたところと、暮らすところと、死ぬところが全部違うから落ち着かないのでしょうね。でも、縄文人は私らと同じでしたよ。だから縄文人にもふるさとっていう言葉はなかったようですよ。

人間の言うふるさとは、私らの言葉で言えば、生まれて暮らして死ぬところですよ。人間も本当はそういうところが一番合っていると思いますよ。どうしてかといいますと、生まれた場所が最も自分に適しているからです。

自分に適しているところ

土も水も空気も風も、そして太陽の光もまわりの生き物たちも、私がそこにいることに条件が全部合っています。人間だってそうではないのですか？　身土不二という言葉をお坊さんから聞いたことがありますよ。人間の体は生まれた場所の土と一緒だという意味でしょう。だから生まれた土地にできるものを食べなさいと言うのでしょう。それが体にも心にも一番適応していると言うことですよね。

すべてを受け容れて

私らは動かない生き方をしていますから、生まれた場所にいるだけでほかの生き物、たとえば、虫や鳥や人間の役に立っています。そして、いいこともよくないこともすべてを受け容れます。私らは常に全体の一部だと思っています。だから、まわりの全てに感応します。すべてが快適で効率的ではありませんが、それが私らの自在な生き方になっています。人間は死ぬときはふるさとでなんて言うでしょう。動き過ぎると自分中心になって、遂には自分を見失ってしまうのでしょうね。動かない方が心は安らかで穏やかになります。

ヨモギ

生き死に

茨木の須賀神社に樹齢九〇〇年を超えるクスの樹があります。このクスに「生き死にとは何ですか?」と質問してみました。クスは地球のことも、人間のことも、悠久の時を観てきています。何でも知っている語り部です。

生き死には特別のことではない

いま、人間界では俄かに生き死にのことが騒がれているようですね。なんでも「おくりびと」がアカデミー賞をもらったとか、「悼む人」がベストセラーになったとか、ちょっと以前には「納棺夫日記」という本も評判になっていましたね。

私ら植物界では生き死には特別のことではありません。当り前のことです。ですから常日頃死を避けたりすることはありません。特別に話題になることもありません。だって、子孫を残すために種を無数に飛ばしますが、その大半は発芽しなかったり、動物に食べられたりしますから、種が死ぬのは当たり前のことです。むしろ生き残る方が不思議です。しかも、発芽しても密集して競い合わないと大きくなれ

ません。そして早く大きくなったものが小さいのを間引きします。発芽した後も死ぬ方が多いのです。

生きているほうが不思議

人間だって、何億という精子のたった一つが卵子と結合して子供が生まれるのですから、精子の九九%は死んでしまうわけで、生きているほうが不思議なのです。

植物にとって死ぬということは枯れることです。萎えることです。体から水分がなくなるのです。

ああそうそう、これは人間でも同じですね。ある行者から聞いた話ですが、行者は死期を悟ると、まず五穀を断ち、木食（木の実・木の根を食べる）に入り、やがて葉先の露だけの断食をするそうです。二週間もすると体は枯れ木のようになり、枯死状態となるのだそうです。つまり死に至るのです。

生死どちらにも役割がある

植物は生きている間も死んでからも役割を持っています。生きている間は光合成

を行って酸素を生み出して動物の役に立ちます。死ぬと微生物や菌類の糧となり、やがて朽ちて土となり水となり再び仲間を育てる役割があります。人間も同じだと思います。生は自然の循環と共同体を維持する役割を持っています。両親を三〇代遡ると一〇億人を越えますが、死は一〇億人の生命の連鎖に入ることなのです。

樹齢 900 年のクス　須賀神社

樹恩

日本の寺院・僧坊など伽藍建築に重用されてきたヒノキと、樹と人間のかかわりについて話してみました。「お釈迦さんは〝樹恩〟ということを言っていたように聞いていますが、どういうことなのでしょうか？」

私ら樹は、あなた方人間に何かをしてあげようと思っているわけではありません。ただ自然にしたがって生きているだけですが、お釈迦さんは樹に恩を受けている、樹がなければ人間は滅びてしまうとおっしゃっていました。

「人間は鉄や石油を生産していると言っていますが、それは地球の中から取り出しているだけで、何も生産はしていないのですね？」

そうだと思います。人間は自然を利用しているだけだと思います。確かに樹は、太陽の光合成で本当の生産をしています。私ら樹の生きる糧であるでんぷんを生産していますし、人間が生きるために絶対必要な酸素も生産しています。

私らは人間も樹もみんな自然の分身だと思っています。誰が偉いということはありません。みんなつながっています。つながっているから、樹を伐ったら植えると

いうことが大切になります。法隆寺が一三〇〇年ももっているのは樹齢一三〇〇年のヒノキを使っているからです。しかし、今、日本に樹齢一〇〇〇年を越えるヒノキはありません。法隆寺を建立した時にヒノキを植えておけば、今それを使えますが、伐るだけで植えなかったのですね。だから台湾まで宮大工がヒノキを買いに行かねばならないのです。その台湾でもヒノキの伐採禁止が決まっています。もう一〇〇〇年もつ法隆寺の再建はできないのです。

お釈迦さんの〝樹恩〟というのは、自然を破壊してはいけない、自然に生かされている分身のすべてのつながりを切ってはいけない、それではじめて自然の恩恵を受けることができるということなのだと思います。

●寄せられた投稿／まるこさん

無口な樹：まおよい、分かってくれてほっとしました。ほんま、人は自分の都合で物事を見なさる。

まるこ：すんません。脳味噌の構造がそうなっているもので。きっと、お釈迦さまは直観力で、樹恩を持ち出して、欲張りの暴徒をとめる手立てとされてるよう感じます。

無口な樹：あんたたちやっかいなんだ。「万物の霊長」は上下関係だよ。人は自尊心やら萎縮心でいらない心をつかう。霊を感じるのはわしらの方が長けておる。うぬぼれが身を滅ぼすでしょう。極めたお人達はベートーベンでもノーベル賞受賞の人でも宇宙飛行士でも、人間は創造しないといいなさる。

まるこ：こころします。

無口な樹：私らはそのままを生きる。立松つぁんは法隆寺の大黒柱を植える運動してはるが、その桧は芽を出して大きく育つ。伐られても文句を言わない。

まるこ：人には人間と人があって、人間は社会という狭い世界での訳もわからんしきたりで縛り合って文句を言い合っています。

無口な樹：きっきっきっ　ま、いいじゃないか。それにしても、まおよい、わしらをわかってくれてるね。あんたの吐き出す息でわしらの子供が育つ。この世はうまくできてると思うなあ。

●寄せられた投稿／茨木市の読者

二〇〇九年六月号の記事で、「植物との対話」は心に影響する記事満載。特に、雌雄の話。

便利と効率は悪

イチョウは成長が早く長寿で巨木が多いといわれています。雌雄異株で、実は雌株になりますが、実がなるのは孫の代だそうです。中生代に栄えた樹種で、その唯一の生き残りです。

地上二〇メートルを超える巨大で長生きのイチョウに、「あなたは便利さや効率のよさを求めたことはないのですか？」と聞いてみました。

私らは同じ場所で動かずに、一〇〇％自然に遵って生きていますから、便利さや効率のよさとは無縁です。あるがままです。便利なことも不便なことも、楽しいことも辛いことも、効率の良いことも悪いことも、すべてがひとつです。便利で快適で効率よくなどという欲はまったくありません。耐えるとか忍ぶとか抵抗するということも一切ありません。ただただすべてを素直に受け容れるだけです。

嵐がきても、洪水が起こっても、火事にあっても、人間に伐られても、鳥が巣を組んでも、不思議に銀杏が好きなアライグマがかじっても、みんな黙って受け容れ

ます。受け容れる生き方が私らの基本です。

すべてを受け容れる生き方は、無私の知恵がないとできないと思います。無私というのはみんなひとつだということです。〝私〟という個が特別に存在しているわけではありません。すべてがひとつで、ただ役割が違っているだけです。

人間の世界では個性化や差別化が大事にされていますから、みんなひとつという認識はできないと思います。〝私は私〟で他人とは違うということになりますね。だから他人よりも便利で効率のよい生活が理想だと信じるのでしょうね。

サニータウンのイチョウ並木

私ら植物の世界では、個は存在しませんので、個の欲もありません。個が求める便利さや効率のよさは私らにとっては悪です。あってはいけないことですし、ありえません。みんなの幸いはありますが、私の幸せはありません。

●寄せられた投稿／ＭＭさん

銀杏の木とも気が合います。小さな自分の穴から、広い空に飛び立った境地で観られての「便利効率」＝欲の喝破、お見事です。便利効率の後ろに隠れていた貧乏神が舌を出しだしましたね。よか無私とか、ほどほどの効率とか、身の丈幸せとか、バランスのとれた欲の出し方はないものでしょうか。学校で一番必要だと思います。

●寄せられた投稿／奈良市　三八歳　会社員

「耐えるとか忍ぶとか抵抗するということも一切ありません。ただただすべてを受け容れるだけです。」

ブナの実が豊作になるとネズミが農作物を喰い荒らす

ブナは緑のダムといわれるほど保水力が高く、地球の重要な水源として大きな役割を果たしています。その上たくさんの果実で人間や熊や野ネズミを潤してくれま

す。そんなブナについてちょっと物騒な話を聞きました。

それはブナの実が豊作になった翌年はネズミの害で畑の作物が全滅するという話です。

実際に、昭和一六（一九四一）年の秋に岩代南会津郡の檜枝岐（ヒノエマタ）村で、八五町歩の畑が野ネズミの害で全滅したという記録があります（武田久吉著「民俗と植物」）。

私が渓流釣りの拠点にしている京都最北端の芦生（アシュウ）には、ブナの原生林があります。檜枝岐村へ行くかわりに、芦生のブナの古木に聞いてきました。本当の話でした。

ワシらブナは五年から一〇年に一度大豊作になるんじゃ。その翌年、野ネズミが前の年の何十倍にもふえて畑を荒らしよる。野ネズミはのう、ブナの実を腹いっぱい食って精力が盛んになるんじゃろうな、異常繁殖をしよる。ところがじゃ、ブナは豊年の翌年は花もつけられんほど消耗するんじゃ。野ネズミの餌はのうなる。それで、村の畑へ現れて作物を食うんじゃ。ジャガイモ、大根、粟や蕎麦の穂、豆類、トウモロコシ、手当たり次第食べ尽くしよる。

ようしたもんで、野ネズミは次のブナの豊作までには、餓死やら凍死で元の数に戻

ブナの木が豊作になると…

るんじゃが、ブナの豊作年がやってくるとその翌年には決まって異常繁殖をしよる。

話は違うんじゃが、熊もブナの豊年にはその実をぎょうさん食って丸々と太る。ところがじゃ、熊の胆は小そうなるんじゃ。そやから例年に比べると熊の胆は安うなってしまうんじゃ。

ブナが豊作になれば、アンタラ人間もブナの実で潤うわな。じゃがのう、野ネズミや熊は反面脅威になるちゅうわけやな。自然界では何かが起こると、みんなつながっとるもんでのう、めぐり巡って予測もできんことが発生するわけじゃ。

アンタラは風が吹いたら箱屋が儲かるいうらしいが、ワシらは長生きじゃからよくよく周りを観察して記憶しておくんじゃ。

《時節》

彼岸花は毎年決まって秋の彼岸の頃に咲きます。しかも、ほぼ全国的に同時に咲くのです。草花の多くは気温や太陽の強さに反応しますが、彼岸花だけは秋の彼岸、秋分の日の頃に咲くのです。不思議に思っていたので、直接彼岸花に聞いてみました。

彼岸は春分の日（三月二〇日頃）と秋分の日（九月二三日頃）の二回あるんじゃが、わしらは秋に一斉に咲く。彼岸ちゅうのは昼夜の長さが一緒じゃな、じゃが春には咲かん。秋の彼岸に咲くのがわしらの時節なのじゃ。あんたらは〝暑さ寒さも彼岸まで〟というじゃろ、わしらはそういう時節にもなっとるようじゃのう。

そうそう、時節ちゅう言い方はのう、あんたらの世界におった良寛さんちゅう坊さんが言うとったそうな。なんでも、新潟地震でなんもかものうした友達に文を送ったそうな。その文で「あんたが受けた地震は時節じゃ」と言うてな、地震は自然界で起こるべくして起こった、被害に遭うた者は自然をそのまま受け容れればいい、そういうもんじゃといいなさったらしい。良寛さんの友達も、それですっかり納得

ヒガンバナ

したちゅうから凄いことやと思うわ。

わしらもな、秋の彼岸が花を咲かすのに一番いい時節なのじゃ。咲くべくして咲くというわけじゃな。

わしらは秋の彼岸に咲いたら枯れる。冬から春にかけては光合成で栄養分を蓄え、新緑の頃には地上から姿を消す。夏まではそのまま地下で球根が休むのじゃ。そうしてまた秋に咲くというわけじゃ。

わしらの祖先はな、うまいこと言うとる。〝花あるとき葉はなく、葉あるとき花はない〟。じゃから彼岸花は相思華やそうな。朝鮮でそういうらしい。花は葉を、葉は花を思うというわけじゃな。なんとも言いえて妙とはこのことじゃ。それに、あんたらは知らんじゃろうが、わしらは球根で増えて、種なしなのじゃ。雄しべ雌しべもあって蜜も出すんじゃが、種はないんじゃ。これがわしらの時節でのう、種明かしというわけじゃ。

「サクラ」

花見に出かけた折に、ソメイヨシノの老木に「あなたはどうしてサクラというのですか？」と訊ねてみました。

そうさな、わしらの名前について聞かれたのははじめてじゃよ。よう聞いてくれた。実はなあ、サクラは「サ・クラ」なんじゃ。深い意味がある。

「サ」は稲のことじゃ。サツキ（五月）、サナエ（早苗）、サオトメ（早乙女）、サノボリ（早上）、サバエ（五月蝿）なんかの「サ」も同じ意味なんじゃ。つまりな、「サ」は稲の神様のことをいうんじゃよ。

「クラ」はな、座・蔵・庫と書いてな、鞍のように物をのせるもの、高御座（タカミクラ）のように座る場所、磐座（イワクラ）のようなまつる場所、大切なものをしまう場所という意味がある。あんたらの股座（マタグラ）いうのも大事な場所じゃろうが。

「サ・クラ」という名前はなあ、稲の神様が降りてこられる樹ということになるんじゃ。日本は稲作を国の礎にしたからのう、春の稲作の神事が花見ということじゃったと思う。稲の神様が「サ・クラ」の樹を拠り代にして降りてきて豊作を約束した

わけじゃな。あんたらの祖先も「サ・クラ」に豊作を祈ったということじゃな。

日本ではサクラといえばヤマザクラじゃった。吉野のサクラもこれじゃ。ヤマザクラはのう、葉と花が同時に開く。葉と花の味わいを一緒に楽しめるわけじゃな。

ところが、日本で一番多いサクラの仲間はなあ、わしと同じソメイヨシノじゃ。わしらの祖先はエドヒガンとオオシマザクラじゃ。江戸時代に染井村で改良されたので、この名前がついたんじゃ。ソメイヨシノはまず花が咲いて、それから葉が花を追いやって開く。あんたらは、花が何分咲きになったといって楽しみ、満開になったといって楽しみ、次は葉桜を楽しむというわけじゃな。結構なサクラなわけじゃ。

もうひとつ変わった仲間もおるが、ご存知かな？　ウワミズザクラじゃ。これはなあ、葉が開いたあとに、花

が穂になって咲くサクラなんじゃ。花穂のサクラじゃ。サクラといっても色々あろうが。飲み食いばかりじゃのうて、サクラをよく観察してほしいもんじゃのう。

「葉」という字

七月ともなると、そろそろ「ウドの大木」という言葉が出てきそうです。そこで、どうしてこんな風に言われるのか、そのウドに聞いてみました。

まったくあんたら人間はわしら植物をバカにしとる。動けんようになって、意識がのうなった人間のことを植物人間というらしいが、これと一緒じゃよ。植物は動かんことを生き方にしとるし、動かんからいうて意識がないというのは錯覚じゃよ。

ウドの大木ちゅうのはな、正確には「ウドの大木柱にならぬ」ということらしい。若い間は食えるが、大きくなると食えんばかりか、木材にもならんということじゃ。わしらは草じゃから木の代わりができんのは当たり前じゃよ。それに、わしらは二

～三メートルくらいになるんじゃが、それでも若葉や苗はいつでも食えるぞ。大木になったとて役に立つんじゃ。あんたら人間が使い方を知らんだけのことよ。

ほかにもなあ、「ウドの煮え太り」というのも聞いたことがあるわい。大きいだけで役立たずということらしい。わしらが大きいなるんはな、それなりのわけがあってのことじゃ。日陰でも成長するためじゃ。それに太く高いということはな、少々の台風くらいでは倒れんし、種を遠くへ飛ばせるということじゃ。

あんたらもよう考えてほしいんじゃが、「葉」という字を作ったんはあんたらのご先祖じゃろう？　この字はのう、草と木の間に人の世があるという意味じゃ。草木はのう、根が水を吸うて、葉が二酸化炭素と太陽の光をもろうてのう、葉緑体で光合成をするんじゃ。これでわしらのエネルギー源のでんぷんを作ってのう、いらん酸素を捨てるわけじゃな。あんたらはわしらの産業廃棄物の酸素がないと生きてはおれん筈じゃな。そうはいうてもなあ、あんたら動物が死んで土に戻るとわしらはそれを糧にするわけじゃから、わしらもあんたらがのうては結局は生きていけんのじゃ。これが生態系というもんじゃな。お互い様ということじゃな。

ただのう、生態系の元はわしら植物にあるちゅうことだけは間違いのないこと

じゃと思う。

ウド

連作障害

同じ畑で続けて同じ野菜を作ると育ちが悪くなったり、出来がよくなかったりすることを連作障害といいます。スイカやナスやトマトはその代表例です。トマトにその連作障害のことを聞いてみました。

そうさなあ～、わしらは一回作った畑は六年空けろといわれておる。しかしだなあ、それは土によるんじゃ。土がよければ連作障害などは起こらん。わしらトマトは、アブラムシに汁を吸われたり、ハモグリバエに葉をかじられたりする。葉に斑点が出たり縮れたりするウイルス病、葉に白いカビがはえるウドンコ粉病、元気な株が枯れてしまう青枯病もある。これらの原因は土にあるんじゃ。土の分解能力がなくなると、害虫や悪い微生物に負けるんじゃな。ところがじゃ、あんたらは害虫には殺虫剤、病害微生物には農薬を使うじゃろ。これが悪循環なのじゃ

な、これがまた土の分解能力をなくしてしまうのじゃ。

わしらは自分で根や葉から有害物質を出すことがある。これも連作障害の原因になる。自業自得というわけじゃな。しかし、これだって土に分解能力があれば連作障害はない。

良いものも悪いものも含めて土の中の微生物が均衡していれば分解能力は衰えない。分解能力さえあれば連作障害は起こらんのじゃ。昔から天地返しがよく行われたじゃろ。あれはなあ、土の分解能力を維持する方法なんじゃ。

連作障害を避けるために、輪作といって畑を替えたり、耐病性のあるほかの野菜の株に接木をしたり、土壌改良剤を使ったりするが、これは邪道じゃ。その前に土を掘り返す天地返しをする方がいい。そして、微生物の均衡を保つ自然土壌づくりをすることじゃな。農薬を使わずに、落ち葉や糠を使った有機肥料を使い、相性のいい輪作をすることじゃ。例えば、イネ科の次にマメ科を栽培し、その後に根菜類を作るというようにじゃ。これで連作障害はなくなる。

パンダの主食は竹

パンダは竹しか食べないと思っている人が多いようです。実はパンダは雑食性で、稀にですが、小型哺乳類や魚や昆虫も食べます。果物も食べます。

竹が主食であることには間違いありません。竹だけ食べていても充分なようです。その竹に聞いてみました。

わしはなあ、茎が木のように堅くなるんでのう木といわれたり、筍をみて木ではなく葉だともいわれる。どっちでもいいが、葉が堅くなるとでも思ってくれたらいい。

わしらはパンダの主食になっておるが、栄養価は小麦並みじゃ。栄養価は非常に高いわけじゃ。

それにのう、竹は生薬でもあるんじゃな。ハチクと

マダケの葉は竹葉（チクヨウ）といわれて解熱・利尿の生薬じゃ。それにハチクとマダケの茎は竹茹（チクジョ）という解熱・鎮吐の生薬じゃし、タンチクとハチクの茎を火で炙ると竹瀝（チクレキ）という液体の生薬になる。まあいってみれば薬草なんじゃ。

パンダは栄養価があって、その上薬草を食べておるということになる。

あんたら人間は日に三〇品目とかいうておるようじゃが、パンダは竹一品でもチャンと生きておる。動物園ではパンダに毎日毎食竹を食べさせておる。それでも病気もせず、しっかり健康なんじゃな。

あんたらは毎食違うものを食わないかんと思うておるのじゃないか？　食堂にも日替わり定食というのがあるらしい。毎日毎食同じものでいいんじゃ。

あんたらのご先祖も一汁一菜を長いことしておったんじゃ。一汁一菜は、ご飯に、汁ものひとつとおかず一品という意味じゃ。ご飯は当たり前すぎて前提になっておるわけじゃな。違うものを沢山食べにゃいかんというのは間違っておるんじゃよ。この考え方はな、森のない西洋人が家畜を早く成長させるためにやりだしたことじゃよ。必要以上に栄養価を高くして、量も沢山摂らせて、早く太らせる方法なんじゃな。こんなことを人間が真似したらいかん。

二度咲き

花の世界に「二度咲き」という言葉があります。一年に二度咲くということなのですが、どうも意味の違う二つの場合があるようです。ひとつは、開花期でない時に咲く〝狂い咲き〟です。もうひとつは、春と秋に開花期が訪れる〝二季咲き〟です。

サクラやウメは、夏に花芽（カガ）を形成し、翌春に開花します。ところが、これが秋に狂い咲きすることがあります。その原因は病害虫や気候変動によって、花芽の成長が滞ることにあるといわれています。

ただ、狂い咲きにはもうひとつ、花弁の配列が狂って本来の花の形と異なる花が咲くという場合もあります。

バラやチョコレートコスモスは、開花期が春と秋にやってきます。これらは元々花芽の形成が年に二回あるわけです。

花芽の形成は植物の光周性によるとされています。光周性というのは昼の長さと

夜の長さの変化に応ずるということです。

昼の長さが、一三時間以下で開花するコスモス、一四時間以下で開花するキク、一六時間以下で開花するダイズなどは短日性植物といわれます。アサガオ、イネ、枝豆などもこの仲間です。これらは秋冬咲きともいわれます。逆に昼の長さが、一一時間以上で開花する大根、一三時間以上で開花するムクゲ、一四時間以上で開花するホウレンソウなどは長日性植物といわれます。

ほかに、エンドウマメ、キャベツ、レタス、クローバーなども長日性植物です。春夏咲きといわれることもあります。以上のほかに、日照時間に関係なく開花する中日性植物もあります。キュウリ、トウモロコシ、トマト、ナス、ヒマワリなどです。

私のような素人は植物の成長には温度が最も影響すると思いがちです。しかし、気温や栄養素よりも光周性の方が植物の成長には決定的に重要なようです。植物の開花期を左右するのは日照時間なのです。

佐藤眞生（さとうまお）

腹六分、穀菜食中心。日に２リットル摂水。週２回半日断食。丹田呼吸。休耕田３反と耕作放棄田１反を里山保全契約で耕作。野菜自給 17 年目。米自給１年目。

野草てんぷらの実演 ― 野草の採取、下拵え、調理、試食、後片付け。

月刊対話紙「自然人」、「芸術の森ニュース」発信。

植物との対話エッセイ連載。

百年都市構想の茨木未来倶楽部、未来へ魂と知恵を伝える語り部の伝承塾、縄文魂を学ぶ縄文直観塾主宰。

マチ型の生活共同体構築を模索中。

主な著書／「ファッション商品の販売戦略」（日本実業出版社）、「くすりやさんの接客マニュアル」（千曲秀版社）、「生活発想学」全３巻（ライフデザインセンター）、「縄文魂」（かんぽう）、「ふるさと茨木探検ガイド」（かんぽう）、「茨木がまちになった６つの物語』（かんぽう）、「縄文の遺伝子」（かんぽう）、「こころは腸次第」（かんぽう）、「葬式革命」（かんぽう）、「野草てんぷら」（バーズアイ出版）、「ふるさと―日本生まれ変わりの基本構想」（茨木未来倶楽部）、「足るを知る」（茨木未来倶楽部）、マオじいの結（ゆい）シリーズ（茨木未来倶楽部　刊行中）

マオじいの結（ユイ）「**植物との対話**」
初版発行　2013 年６月８日

著　　者　佐藤眞生
表紙・挿画　佐藤　澪
揮　　毫　池田寿村（裏表紙「吾唯足知」）
発　　行　茨木未来倶楽部
本 文 組 版　編集工房ＤＥＰ／桐生敏明
印刷・製本　モリモト印刷株式会社

© Mao Satou　Printed in Japan 2013